

洗堰上流に侵入したチャネルキャットフィッシュの殲滅まであと少しだったのに

○石崎大介・田口貴史（滋賀県水産試験場）・藤井明美・近野真央・近藤昭宏・中村昌文
（株式会社日吉）・山中裕樹（龍谷大学先端理工学部）

チャネルキャットフィッシュは北米原産で特定外来生物に指定されている。琵琶湖および瀬田川では2001年に初めて確認され、その後2011年までは12個体のみの確認であったが、2012年から瀬田川洗堰（以下、洗堰）下流（図1）で頻繁に確認されるようになった（図2）。そして2018年から洗堰上流でも確認数が増加し、2019年には確認数が激増した。

洗堰上流の瀬田川および南湖南部において生息状況を把握するために2019年から3～11月の毎月、延縄を用いた調査を実施した。延縄はエサにアユを用い最大針数540本を仕掛け翌日引き揚げた。そして瀬田川上流水域における本種の針100本あたりの採捕個体数を算出してCPUEとした。また、滋賀県漁業協同組合連合会では延縄による駆除事業を2019年から当水域で実施しており、その結果についても同様にCPUEを算出した。そして月ごとの平均CPUEを算出して各年の傾向を比較した。また2019年と2021年については特に本種の採捕が集中していた洗堰から上流約1500mの区間において、9月から10月または11月までの各操業の幼魚のCPUEからデューリー法を用いて発生個体数を推定した。加えて2019年9月からは延縄調査時に採水を行い、環境DNA調査を行った。

瀬田川上流でのCPUEは2019年9月に著しく上昇し、2020年8月までは高い状態であったが、その後は著しく低下して2021年6月までは低い状態を保った。2019年のCPUEの上昇は繁殖したと考えられる幼魚が多数採捕されたためであり、その発生数は約200個体と推定されたが、2020年8月までにほとんどが採捕されたと考えられた。2021年7月から再びCPUEが上昇したが、これは個体数の多い洗堰下流から新たな成魚が侵入したことや、洗堰上流で再び繁殖した幼魚が採捕され始めたためと考えられる。環境DNA調査ではCPUEが低い期間でも継続的に本種のDNAが検出されており、洗堰上流で繁殖した幼魚のDNAを検出していた可能性もある。

洗堰上流における延縄駆除は本種の生息数抑制に効果があったと考えられるが、今後は洗堰の下流からの再侵入を防ぐ対策や、侵入した個体の繁殖を抑える対策が必要である。

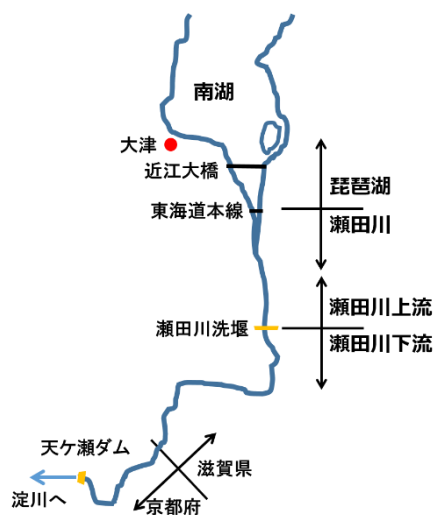


図1. 琵琶湖南湖と瀬田川の位置関係

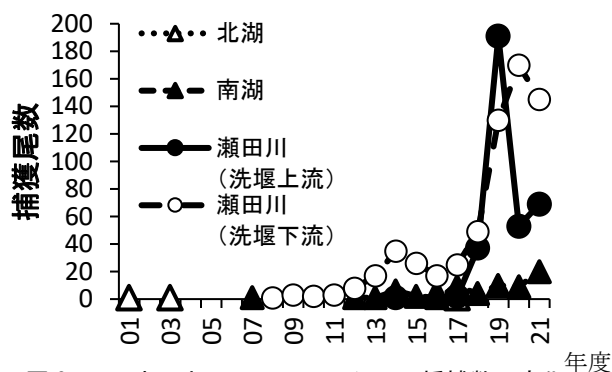


図2. チャネルキャットフィッシュの採捕数の変化